

 共通教材
ノート

グリーグ作曲

「ノルウェー舞曲」第2番

渡邊學而〔音楽評論家〕

エドゥアルト・グリーグ（1843～1907）の作曲した『4つのノルウェー舞曲』作品35は、1881年、38歳の年の作品である。これらはいずれもピアノ連弾用の作品として作曲されたものだが、のちに管弦楽用にも編曲され、現在では管弦楽版の方が演奏される機会が多い。

作品の素材：ハリング

グリーグの作品には、ノルウェーの民謡や民族舞曲を用いたものが多いが、この『4つのノルウェー舞曲』もその例である。とくに第2番は、ノルウェーの典型的な民族舞曲のひとつであるハリング（Halling）の形で書かれている。

ハリングは、オスロとベルゲンの間にあるハリングダル（Hallingdal）という地名に由来している。ここはオスロから北西約50～60kmのところにあるスカンジナビア山脈の中の峡谷で、この地方で踊られている踊りがその源になっているという。もっともこの踊りは、元来スコットランドの高地の民族舞曲がもとになっているともいわれている。通常4分の2拍子、テンポがアレグロットあるいはアレグロ・モデラートの舞曲で、集団の踊りではなく、一人ずつ踊り、多くの場合二つか三つの踊りを競いながら踊る形を

とる。

また、この踊りの伴奏楽器には、ハードンガー・フィーデル（Hardanger Fiedel）という弦楽器が用いられる。この楽器については後述するが、19世紀の中ごろには、トルゲイル・アウドゥンソンやクヌート・マリセルといったこの楽器の名手があり、多くのハリングの曲を作曲している。グリーグも自分の作品の中に彼らの曲をかなり用いており、たとえば『ノルウェー農民の舞曲集』（スロットテル集）作品72はその代表的な例である。

またもうひとつ、グリーグの民族的素材のもとになったものに、ルドヴィーク・マティアス・リンネマン（1812～1887）の蒐集したノルウェーの民族音楽集がある。リンネマンは、父親がオルガニストであったこともあって、クリスチャニア（現在のオスロ）の救世主教会のオルガニストをつとめ、作曲家としてはおもに教会音楽作品を残している。しかし何といってもノルウェーの民族音楽蒐集家としての功績は大きく、1848年からノルウェー各地を旅行して歌や器楽曲を蒐集してまわり、1853年に『古い、また新しい山のメロディー』と題する曲集の第1巻を出版した。これは全部で3巻出版され、その中には約600曲がおさめられており、



これらもグリーグに多くの素材を提供している。たとえば、ノルウェー舞曲第1番ニ短調には「シンクレアー・マーチ」として知られている楽想が用いられているが、これはリンネマンの曲集から採られたものである。

ハルダンガー・フィーデル

ハルダンガー・フィーデルという呼び方はドイツ語で、英語ではハルダンガー・フィドウル (Hardanger fiddle)、ノルウェー語ではハリングフェーレ (Hardingfele) という。ノルウェーの古い民族的な弦楽器で、ヴィオール系の楽器に近く、ビオラ・ダモーレに似ている。ノルウェーの南西部、ベルゲンの近郊にあるハルダンガー地方で多く用いられていたことから、この名前が付けられている。この地方には、ハルダンガー山やハルダンガー・フィヨルドがあり、とくにこのフィヨルドはノルウェーでもっとも有名なもののひとつで、全長183km、深さ830mの荘大な景観を呈している。

この楽器は、指で押えて音程を変えられる通常のメロディー弦が4本あり、その点はバイオリンなどと同じであるが、その下にさらに4本の共鳴弦が付けられているのが特色である。その調弦法は一

定しておらず、20種類以上あるといわれるが、もっとも多く用いられるのは、次の2種類のやり方だという。

メロディー弦

$e \sim a \sim d \sim a \quad e \sim a \sim c \sim g$

共鳴弦

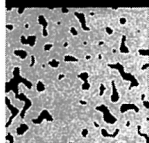
$d \sim e \sim f \# \sim a \quad c \sim e \sim g \sim a$

そしてこの楽器の特色がハリングの特色にも結び付いている場合が多いのだが、それについては次回に記すことにする。

なお、現在残されているもっとも古い楽器は、ハルダンガーのオーレ・ヨンセン・ヤースターが1651年に製作したものである〔写真参照〕。また18世紀には、イサーク・ニールセン・スカール (1663~1759) や息子のトロン・イサークセン (1712~1772) などがすぐれた楽器を作っていたが、19世紀には、テレマルクのバイオリン製作者エリック・ヨーセン・ヘラン (1816~1886) が大幅に改良した楽器が使われていたという。

(つづく)

共通教材
ノート



グリーグ作曲

「ノルウェー舞曲」第2番 —その2

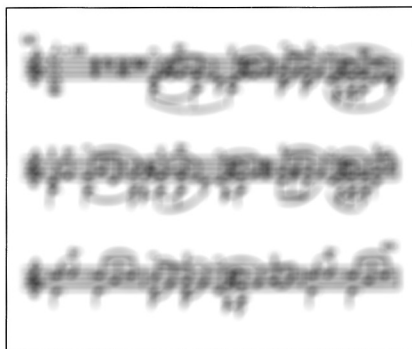
渡邊學而

ハルダンガー・フィーデルの特色

ノルウェーの民族楽器であるハルダンガー・フィーデルの構造については、前回述べておいたが、ここではこの楽器が弾き出す音楽の特色について少し触れておこう。演奏のやり方は、バイオリンなどの弦楽器と同じように弦を弓でこすのか、指ではじくかして音を出すのだが、この楽器の演奏の大きな特色の一つに、ドローン効果、すなわち低音や中音の持続音をさかんに用いることが上げられる。

これは古い弦楽器、たとえばドローン弦をもっていた中世のヴィエールなどの系統を引くともいえる。この楽器に共鳴弦があるのもそのためだが、実際の演奏にあたっても、低音あるいは中音域の同じ音を長く伸ばすか、連続的に弾くことによってその効果を出している。譜例は、ハルダンガー・フィーデルの演奏を楽譜に記したものであるが、これをみても低声部のg音と中声部のd音がドローン的な効果を生み出しているのがわかる。

さて、この楽器のこのような特色を知って、教材である『ノルウェー舞曲』第2番をよく聴いてみよう。原曲のピアノ連弾であっても、管弦楽用の編曲であっても、とくに前後の主部のところに、この



ようなドローン効果をもつ音が使われているのがわかる。だからグリーグがこの曲のもとにしたハリングも、ハルダンガー・フィーデルのための曲であったことが推測されるのである。

管弦楽用の編曲

グリーグは、同じ4曲から成るピアノ連弾用の作品でも、『交響的舞曲集作品64』は自分で管弦楽用に編曲しているが、このノルウェー舞曲集は編曲していない。現在もっとも多く使われている管弦楽用の版は、おそらくハンス・ジット(1850~1922)の編曲であろう。ジットはプラハ音楽院で勉強したボヘミアのバイオリニストで、その後ライプツィヒでブロードスキー弦楽四重奏団のピオラ奏者やライプツィヒ音楽院のバイオリン科の教



授をつとめた人である。アドルフ・ブロドスキーといえば、やはり当時ライブツィヒ音楽院の教授で、1881年にウィーンでチャイコフスキーのバイオリン協奏曲を初演した人としても知られている。

ところで、このノルウェー舞曲集の管弦楽版が初演されたのは、1885年12月にコペンハーゲンで行なわれたグリーグの演奏会であったが、この時に使われたのはジット版ではなく、フランク・ファン・デア・ストウッケン（1858～1929）の編曲だったともいわれている。ストウッケンはテキサス州生まれのアメリカの指揮者で作曲家だが、少年時代にアントワープに移り、その後ライブツィヒで勉強し、グリーグにも学んだことのある人である。このコペンハーゲンの演奏会では、このほか『パール・ギュント』の中の「山の魔王の殿堂で」をバレエ音楽にした版と、『ノルウェーの婚礼の行列』作品19の2の管弦楽用編曲も演奏されたが、そのいずれもがストウッケンの編曲であったことにもよる。

現在日本では出ている録音の多くの演奏は、ジット版によるといえるが、しかしこのようにいくつかの編曲が存在する可能性があることも念頭に入れておく必要がある。

ハリングを用いたグリーグの作品

最後に参考までに、グリーグの作品の中でハリング舞曲の形で書かれている曲の例をいくつか上げておこう。『ノルウェー舞曲』第2番と比較して聴かせると、この舞曲の性格や特色がいつそうよくわかるように思う。

—ピアノ独奏曲—

1. 『抒情小曲集』から、第2巻作品38の第4曲、同第4巻作品47の第4曲、同第10巻作品71の第5曲

2. 『25のノルウェーの民謡と踊り作品17』から、第7曲、第20曲

3. 『ノルウェー農民の舞曲集（スロテル集）作品72』から、第10曲、第11曲

—ピアノ連弾曲および管弦楽曲—

1. 『4つのノルウェー舞曲作品35』から、第3番ト長調、第4番ニ短調

2. 『交響的舞曲集作品64』から、第1番ト長調、第2番イ長調

—合唱曲—

1. 『男声合唱のためのアルバム作品30～ノルウェー民謡の自由な編曲』（全12曲）から、第4番、第8番

〔音楽評論家〕